

# ジャカルタMRTにおける安全管理対策のための OSV計測技術の普及促進事業

## — 補足説明資料 —



- 事業内容
- 経緯
- 課題(スケジュール)
- 本事業の効果
- 共同提案・外部人材

# Phase1

## フェーズ1

- インドネシア国 ジャカルタメトロへのコミットメント
- OSV計測装置の導入・設置
- ローカルエンジニアへの教育

工事現場の安全管理を、より高いレベルに押し上げ、作業員、施主らが一体となった新時代のセーフティーマネジメントを構築

2015年2月

事業採択前より本邦でのセミナー研修を開催し、有効性をアピール

2015年6月

採択決定

2015年7月

実施国でのキックオフミーティング、協力機関へのプレゼン

2015年8月～9月

新しい安全管理技術の浸透、OSV計測を活用した安全管理手法の提案  
OSV計測技術をローカルエンジニアへ伝達

# Phase2

## フェーズ2

- OSV計測の認知度向上を目的とした安全教育・避難訓練の実施

2015年10月～11月

- ・OSV計測技術により「誰もがわかりやすい」工事現場の安全管理を構築する
- ・実施国エンジニアへのOSV装置の利便性、優位性を浸透させる
- ・安全に対する技術と意識を高める
- ・工事現場の安全管理を、より高いレベル押し上げる



# Phase3

## フェーズ3

- OSV計測技術のWorkshop・展示会開催

2015年12月

- ・OSV計測装置販路を開くビジネス展開
- ・日本の技術を生かして安全という社会貢献をアピール



Workshop : 於 12月ジャカルタ市内ホテル



参加者：約40名

●ジャカルタMRT関係者、ジャカルタ特別州政府関係者、インドネシア鉄道局

# 「JICA民間技術普及促進事業スキームへ至るまでの経緯」

2006	神戸大学においてOSV計測技術の研究を開始
2010	OSV研究会を設立(産学連携)
2010～2011	JICA支援「インド国 デリーメトロ、バンガロールメトロの安全管理業務」においてOSV計測技術のパイロット調査を経験  事業において開催したセミナーにインドネシア高速鉄道関係者を招聘  <b>「工事現場の安全確保と作業員の健康管理は、共通の課題。バンガロールの例は大いに参考になった」と評価 → OSV計測へ高い関心を得た</b>
2014	ジャカルタMRT事業にOSV研究会関係者が設計業務で参画 OSV計測の視覚的技術を用いた安全管理を紹介
2015	ジャカルタMRT事業者のキーマンを本邦へ招聘 3か国のMRT関係者を集めたセミナーを開催し、OSV計測技術の有効性を認知  <b>「民間技術普及促進事業」へ応募</b>

# 本事業に至るまでの経緯

2015

2014

2010

2011

2012-2013

JICA  
インド地下鉄事業へ採用

デリー

バンガロール

ジャカルタMRT  
人脈形成

実施機関を  
本邦への招聘

民間技術普及促進事業実施  
ジャカルタMRT

## 2010年-2014年

JICA支援のもとで、インド地下鉄事業でのパイロット調査を経験

- この事業を契機にジャカルタMRTとネットワークを形成

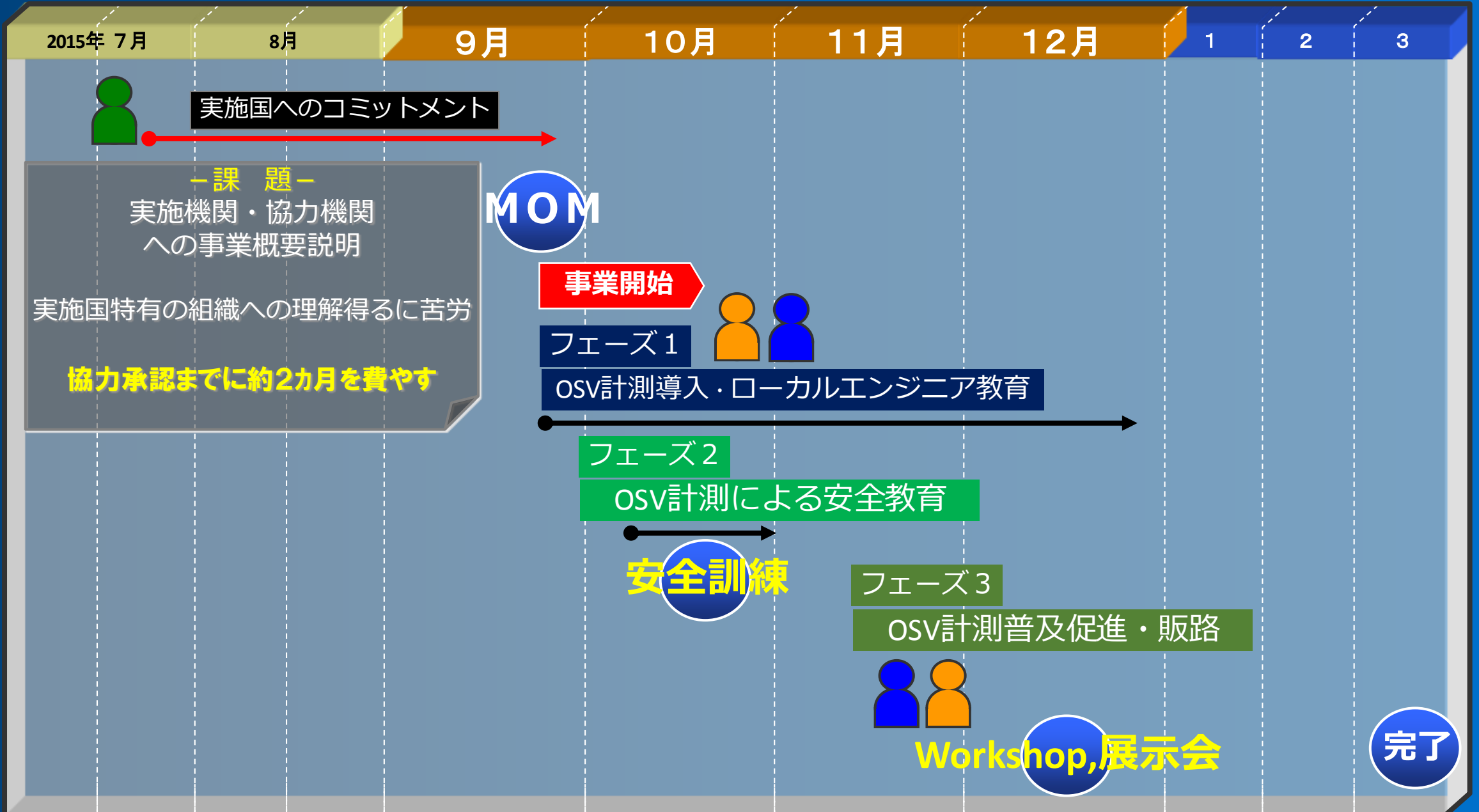
## 2015年2月

ジャカルタMRT建設事業のスケジュールを見極め、本邦へ関係者を招聘し、技術セミナー開催

## 2015年6月

JICA民間技術普及促進事業へ本事業を提案

# 本事業のスケジュール





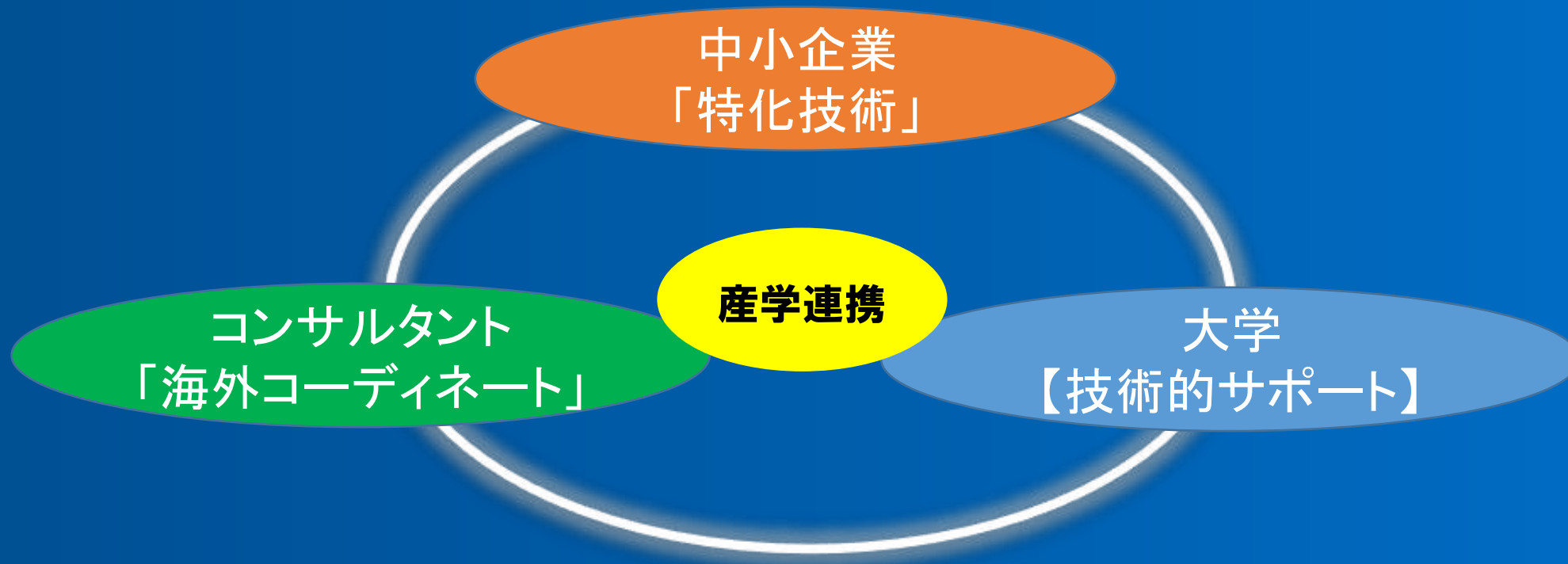
# 民間技術普及促進事業による効果

JICA支援業務を通じ、他国での経験を有効に活かし本プロジェクトに挑んだ。本事業により今後展開するに必要な課題抽出ができ、実施国でのネットワーク形成等、様々な相乗効果が得られた。



日本からの技術導入だけでなく、その技術を用いた知見と経験を実施国関係者と共有できたことは大きな成果であった

# 共同提案によるメリット



- 中小企業が単独で海外への普及促進には様々な障壁があり、我々が連携した外部人材を含めた共同提案による効果は高く、実施機関からも評価を得た。
- 特にインフラ事業などの大型プロジェクトにおいては、現地に精通した企業との連携が不可欠であると考えます。

## 本事業に参加して感じたこと

- 民間技術普及促進事業スキームにおいて、日本の技術を活用し、それを内外に示すことは非常に有効な手段であった。
- 今後の実施国での水平展開、他国での普及に向けて、この事業経験は大きな成果となった。
- 課題を丁寧に解決し、誰にでもわかる安全管理の方法論を提案し、OSV機材を普及促進することで、結果的に「いつの間にか事故がなくなった」という日が来るよう努力を重ねていきたい。